

オランダのイエナプラン教育における教師の指導性

奥村 好美

1. はじめに

本稿は、オランダのイエナプラン教育における教師の指導性について考察するものである。

イエナプラン教育とは、ドイツのイエナ大学の教育学教授ペーターゼン (Petersen, P. 1884-1952) が創始した教育である。イエナプラン教育は 1950 年代にオランダに紹介されオランダで独自に発展してきた。全ての人を人間として尊重し、ともに生きることを重視する理念や、基本的に 3 つの年齢からなる学級 (groep; 以下、グループ) 編成、対話・遊び・仕事 (学習)・催しといった基本活動がリズムックに行われる教育実践などに特徴がある。オランダのイエナプラン教育は、リヒテルズ直子の著作『オランダの教育』(2004)、『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』(2006) 等をきっかけに、日本で着目されるようになる。その後、2010 年には日本イエナプラン教育協会の発足、2019 年には学校法人茂来学園大日向小学校、2022 年には福山市立常石ともに学園の開校など取り組みが広がっている。

ペーターゼンのイエナプラン教育における教師の指導性に関しては、深沢が「指導 (Führung)」概念の検討や¹、「授業の指導」と「授業のなかでの指導」に即した考察を行っている²。ペーターゼンの指導については、手取も「教育的状況」を軸に考察をおこなっている³。さらに、安藤は集団 (グループ) 作業 (Gruppenarbeit) に着目して具体的な授業場面での指導性⁴や教師の役割⁵の検討を行なっている。

一方、オランダのイエナプラン教育における指導性については、リヒテルズが理論と実践を体系的に紹介したり⁶、フェルトハウズ (Velthausz, F.) やウィンターズ (Winters, H.) が、オランダのイエナプラン教育協会が開発された「コア・クオリティ」に基づき、それぞれの指標の説明、具体例、チェックリストを示した

りしている⁷。コア・クオリティ (kernkwaliteiten) とは、オランダの全てのイエナプランスクールが実現に向けて努力することが求められるもので、イエナプランスクールとしての認定に関する基準である。

本稿は、こうした先行研究から学びつつ、さらに低・中・高学年ごとの違いと共通性に目を向けながら、オランダのイエナプランスクールにおける指導性について考察することを目的とする。具体的には、特定のイエナプランスクールにおける、低・中・高学年グループそれぞれの指導の実態について、そこでの教育目標・評価や、指導のあり方を視点に考察を行う。

2. 研究方法

(1) 調査の概要

2023 年 2 月 13 日 (月)、14 日 (火)、16 日 (木)、17 日 (金) の 4 日間、ロッテルダム近郊の町にあるイエナプランスクールで教育活動の観察を行った。具体的なスケジュールは表 1 の通りである。最初の 3 日間で低・中・高学年それぞれのグループを 1 日ずつ訪問した。その際、グループの文化や 1 日の流れを理解しやすくするために、複数のグループを訪れることはせず、各日 1 グループで調査を行った。

表 1 調査スケジュール

日程	グループ (学年/年齢)
13 日	低学年グループ (第 1～2 学年/4～6 才)
14 日	中学年グループ (第 3～5 学年/6～9 才)
16 日	高学年グループ (第 6～8 学年/9～12 才)
17 日	(中学年グループ *カーニバル)

調査においては、子どもたちの登校から下校まで観察を行った。フィールドノーツを作成するとともに、基本的に休み時間を除く全ての教育活動を録画した。また、観察だけでは理解が難しい点について、グルー

ブリーダー（groepsleider; 以下、GL）と呼ばれる教師に聞き取りを行った。なお、17日はカーニバルと呼ばれる、非日常的な行事の日であったことから、今回は調査対象とはしないこととする。

（２）研究対象校

研究対象校は、ロッテルダム近郊の町にあるイエナプランスクールである。3つの分校があり、その1つである。学校ガイドの最初に、イエナプラン教育の特徴である「あなたはユニーク」「学校における教育的（pedagogisch）雰囲気」「ともに話し、ともに働き（学び）、ともに遊び、ともに催す」という3つの理念が掲げられている。研究対象校の選定にあたっては、リヒテルズ直子氏に依頼し、良質のイエナプラン教育を実践している学校の紹介を受けた。

観察するグループについては、研究目的を学校長に伝え、学校長に選択を依頼した。なお、教育活動の観察と記録、及び聞き取りに関しては、個人が特定される形で公表されない、教育・研究目的にのみ使用されること等の研究倫理に関する説明を事前に学校に行い、了承を得ている。

（３）分析方法

フィールドワークでのフィールドノーツと記録した映像から、低・中・高学年グループそれぞれの指導の実態について、そこでの教育目標・評価と、GLの指導のあり方を視点に考察を行った。

3. 教育目標・評価

（１）教育目標

研究対象校が掲げる教育目標についてである。学校ガイドには、教育目標に関して「イエナプランスクールでの教育とは一変し続ける社会において自分の居場所（goede plek）をどのように見つけられるか、加えて他者にそうした場をどのように提供できるかを学ぶことです。読み、書き、言語、算数、ワールドオリエンテーションの学習は、この点で非常に重要です。しかし、社会的スキル、創造性、粘り強さ、計画的スキル、感情に対処する力も非常に重要です」と書かれており、認知面および情意面の両方が大切にされている。

このうち、認知面については、基本的に全ての子どもたちに共通の目標が設定されている。状況や子どもに応じて短期的に目標が調整されることはあるものの、

長期的に育むべき力を子どもによって変えることはない。ただし、これはオランダで定められている、初等学校終了時までに必要な知識・技能等を示した目標である「中核目標」に即して設定されており、必ずしもイエナプラン教育固有の目標というわけではない。

情意面については、「リフレクション」「計画と組織」「柔軟性」「関心の持続性」「イニシアチブを取る」「感情の調整」「学習態度」「ワーキングメモリー」の8つが重要であると教職員で共有されている。それぞれについて5～10の指標も示されている。

（２）教育評価

教育評価としては、8年間を通じてポートフォリオが重視されている。ポートフォリオには、子どもたちが「誇りに思うもの」が定期的を選び入れられる。上手にできた積み木や絵、WOで取り組んだ思い入れのある作品、上手く書けた自由作文、スペリングや地理のテストなどさまざまな作品が入れられる。ただし、中学年以降は、citoのモニタリングシステムの結果もポートフォリオに綴じられる。モニタリングシステムは、長期にわたって定期的に言葉や算数の発達や成長をモニターする評価システムである。全国的なスコア結果もあわせて示され、一種の総括的評価として利用することができる。オランダでは承認されたモニタリングシステムのいずれかをオランダ語と算数・数学で用いることが義務化されている。これについては、必ずしも全てのGLが肯定的に捉えているわけではないものの、保護者に結果を伝える必要があるため入れているということであった。

ポートフォリオについては、每学期末の懇談会前に子どもは自宅に持って帰る。その際には、ポートフォリオに、GLからの記述式の評価や、懇談会で子どもが話したいことやGLが話したいことが事前に書き込まれた用紙も綴じられている。用紙には、保護者が懇談会で話したいことを書き込む欄もある。子どもの成長を多面的に捉え、共有する工夫がなされている。この学校では、これ以外に通知表などは作られていない。

ポートフォリオ以外の評価のあり方としては、認知面については、低学年グループでは、評価指標に基づく観察を通じて、中・高学年グループでは、学習状況のきめ細かな確認やテスト等も用いて形成的評価が行われる。職員室にはフィードバックの重要性について

掲示がされているなど、子どもに応じた即時的なフィードバックとセットでの形成的評価が重視されていた。情意面については、低学年グループでは、「社会感情的発達」の評価指標に基づき、一人ひとりの様子が観察される一方で、中・高学年グループでは、先述した8つの目標について、教師たちがグループ全体のリフレクションを行うことが多いという。また、筆者がGLと話している際、低・中・高学年いずれのGLも「あの子は1年前まで話せなかったけれど、今はあのように友達と話せるようになったの」といった、その子の過去と比べた成長を語ってくれる場面があった。子どものポートフォリオに綴じられるGLからの記述での評価に、こうした点が含まれることも想定される。子ども一人ひとりに情意面での総括的評価を行うことはなく、あくまで子どものより良い発達を促すために形成的評価が実施されていることがわかる。

4. 低・中・高学年ごとの1日の流れにおける指導性 (1) 低学年グループ

1日の流れは表2の通りである。始まる前に1人の子どもがGLの膝に座っている。毎日この子どもは変わる。8:30になると全員で歌を歌い、送ってきた保護者を見送り、朝のサークルが始まる。以後、明記しないが、次の活動への区切りは、常に歌を歌うことで行われる。朝のサークルでは、くじであたった子どもを中心に、それぞれその日の曜日、年月日、本日の出席人数、天気などを確認し、壁の掲示物を変えていた。

8:45頃からは、GLが3名程度の小グループを作り、子どもたちは場所を移動して週末の出来事について話し合っていた。8:50頃になると再度サークルになり、GLは2枚のクリスマスの絵のうち、どちらか1枚を一人ずつ子どもに配る。そして、一人ずつに、ゲームのような感覚で、絵の中から「K」を頭文字とするものを見つけて答えさせていた。

表2 低学年グループの1日の流れ

時間	子どもの活動	GLの働きかけ
8:30	朝のサークル	
8:50	(サークル) 絵から「K」を頭文字とする言葉探し	
9:00	基本的に2～3人ずつに分かれ、活動を行う	9:30頃からポートフォリオに入れる作品を選ぶ対話を一人ずつ行う
10:15	振り返りサークル	

10:30	フルーツサークル	
10:55	(サークル) GLが一人ひとりに文字や文字のままとまりを伝え、子どもが聞き取り、単語を考える	
11:00	外遊び	
12:00	ランチ	
12:30	外遊び	ランチ休憩
13:00	外遊び	
13:30	(サークル) → (個人) 絵から「K」を頭文字とする物を選び取り、ノートに貼る	それぞれの子どもに応じた支援
14:20	帰りのサークル	
14:30	帰宅	

9:00頃からは、基本的に2～3人ずつに分かれ、活動を行う。GLが取り組んでほしい活動を指定する子どもにはその写真が渡されていた。それ以外の子どもは自分のノートにおける取り組みたい活動の箇所を印をつけて選ぶ。その後、活動ごとにグループに分かれ、自分のキーホルダーを、壁に掲示されている取り組み活動の箇所に動かしてから、それぞれが活動を始める。活動には、電子黒板のゲーム、言葉の学習、おままごと、病院ごっこ、積み木、工作などがあつた。

9:30頃からGLは一人ずつ子どもを呼び、ポートフォリオに入れる作品を選ばせる。多くの場合、3枚の写真を見せて選ばせていたが、最初から子どもが入れたいと述べる作品を入れる場合もあつた。その際、なぜその写真や作品を入れたいと思ったのかをGLは聞き取り、メモを取る。「良いと思った」「楽しかった」などの曖昧な言葉ではなく、具体的になぜそれが良いと思っているのか、なぜそれを誇りに思っているのか聞き取られる。低学年の子どもたちはまだ字が書けないため、GLがメモを取り、それを放課後にタイプし、写真に説明がついたポートフォリオのページが作成される。子ども自身がポートフォリオに入れてほしい写真を撮るようGLに頼むこともある。この日も、積み木に取り組んでいた子どもが「上手にできたからポートフォリオに入れるために写真を撮ってほしい」とGLを呼ぶ場面があつた。

10:15頃から、それまでの活動を振り返るサークルが行われる。その際、GLは別の活動をしていた子ども同士で3人組を作り、互いに何を学んだか話し合わせていた。話し合う際には、実際に活動した場所まで互いに足を運び、実物を見ながら話し合っていた。

10:30頃から持参したフルーツ等をサークルで食べ

た後、10:55 頃からサークルのまま、GL が一人ひとりに、「m」「o」「n」「d」や、「tan」「den」のように、文字や文字のまとまりを発音し、組み合わせると何の単語になるのかを子どもに考えさせていた。前者は

「mond (口)」、後者は「tanden (歯)」である。一人ひとりの理解度に合わせて、どの単語をどのようにたずねるかが決められていた。身体や家族を表す単語ばかりが選ばれていたが、それはこの時のワールドオリエンテーション (wereldoriëntatie; 以下、WO) のテーマが「身体と心」であることによる。

11:00 頃から外遊びの時間である。子どもたちは、木に登ったり、三輪車に乗ったりして、思い思いに過ごす。この時、数人の子どもたちが木の上に枝をのせて、ベッドを作り、順番に寝そべて遊んでいた。子どもたちはそれが嬉しくて GL にポートフォリオに入りたいと写真を撮るように頼んでいた。それに対して、GL は、写真を撮りつつも、「これは誇りに思うような取り組みではないからポートフォリオには入れられません。でも、今日写真を家に持って帰れるように後で印刷してあげます」と伝えていた。子どもの希望があれば全てをポートフォリオに入れるのではなく、あくまで、子どもの成長を示す、子どもが自分で誇りに思える取り組みの写真や作品が選ばれていることがわかる。

その後、ランチとさらなる外遊びの時間を経て、13:30 頃から朝のサークルで配られたものと同じ絵が子どもたち一人ひとりに配られる。朝の取り組みを手がかりに、今度はそれぞれが5つ「K」を頭文字とするものを絵から見つけ、その部分の絵を切って、ノートに貼るよう指示がされ、子どもたちは教室中で取り組み始める。GL は教室を見てまわりながら、それぞれの子どもの支援を行う。例えば、オランダでは子どもによって入学時期が異なり、多くの場合4歳になると順次初等学校へ入学するため、低学年グループには、まだ学校に通い始めて3週間の子どもがいた。その子どもには、GL は、「K」を頭文字とするものでなく、「好きな絵を選んで切って貼ってね」と伝えていた。また、1年前は話すことができなかったという子どもが、この日初めて3つの絵を切って貼った様子を見て、褒め言葉をかけていた。全体への指示は同じでも、子どもに応じて働きかけを調整していることがわかる。活動がひと段落すると、片付けをさせ、14:20 頃から

帰りのサークルを行い、14:30 には保護者の迎えのもと1日を終えた。

(2) 中学年グループ

1日の流れは表3の通りである。中学年グループは日本の1～3年生にあたる。このグループでも始まる前に1人の子どもがGLの膝に座っていた。8:30になると全員で歌を歌い、送ってきた保護者を見送る。ただし、中学年では活動の区切りで歌を歌うのはこの時だけであった。朝のサークルでは、当番の子どもが全員の名前を呼んで一人ひとりに挨拶を行い、電子黒板に示されたその日の予定を読み上げる。とても小さな声で、たどたどしくてもみんな耳を傾けている。数名が昨日のできごとについて話した後、子どもたちがそれぞれに週計画ファイルを配り、GLがその日の学習について確認する。

表3 中学年グループの1日の流れ

時間	子どもの活動	GLの働きかけ
8:30	朝のサークル	
9:00	(ブロックアワー) 週計画に基づき自分の学習を行う *9:00と9:30に2名ずつ、他の教師とともに教室の外で学ぶ	*9:10 頃から3年生に「読み理解」のインストラクション *9:25 頃から5年生に算数のインストラクション *9:40 頃から4年生に算数のインストラクション
10:10	各自が設定したテーマでの拡大ブロックアワー	
10:30	フルーツサークル	
10:45	外遊び	
11:00	(ブロックアワー) 週計画に基づき自分の学習を行う	*11:00 頃から一人ひとりの机をまわる *11:10 頃から3年生に算数のインストラクション
12:00	外遊び	
12:30	ランチ	
12:45	読書	*12:50 頃から3名に単語の発音のインストラクション
13:00	ペアで音読み	
13:25	本日の学習の進捗状況確認	
13:30	(WO) (サークル) → (小グループ) 人の身体についての問い・調べた答え・絵をカードに記入する	*13:30 頃 サークルで短く取り組み内容の確認 (~13:35) *13:55 頃 サークルで学習上の留意点を確認 (~14:00)
14:15	片付け	
14:20	帰りのサークル	
14:30	帰宅	

9:00 頃から、ブロックアワーと呼ばれる子どもたち

が自立的に計画を立てて学習を進める時間が始まる。子どもたちは自分の週計画にしたがって、算数やスペリングなどの学習を進める。子どもたちは自分の週計画ファイルを持っている。週計画ファイルは、青色が3年生、赤色が4年生、黄色が5年生と色で学年が区別されている。週計画はどの学年も資料1のように構成されている。ただし、他の教師から特別支援を受ける子どもなど一部の子どもは、その子用の課題等が示されたシートを使っている。中には、パソコンを使って取り組む課題が指定されているケースもある。

資料1 週計画のイメージ図

	算数	スペリング	書くこと	読むこと				振り返り	GLコメント
月		○語							
火		○語			読み理解				
水		○語							
木		○語							
金		○語			読み理解				

縦軸に曜日が書かれ、横軸に教科や科目、自分で取り組みたい課題が書ける欄、振り返り、GLからのコメント欄がある。算数はピンク、スペリングは赤、書くことは黄色、読むことは青のように色が決まっており、決められた色で欄を塗りつぶすことで子どもは学習が終わったことを示す。

算数は基本的に、毎日インストラクションが行われ、それに即した内容の学習を行うことになっている。スペリングについては、3年生は6語、4・5年生は9語のように語数がシートに印字されている。また、壁にどの学年がスペリングファイルのどのシートを行うのが掲示されており、これは週の最初に子どもに伝えられている。子どもたちは、指定されたシートに掲載されている単語のうち、どれに何曜日に取り組むか計画を立てる。なお、その週のスペリングのテーマも、イラストとともに壁に掲示されている。例えば、5年生はこの週は「ch/cht」を含む単語がテーマであったため、壁には飛行機のイラストとともに「vlucht (飛行機)」という単語が「cht」の部分強調して掲示されている。

書くことについては、教室の棚の引き出しに入っているカードを使って子どもたちは学習を行う。例えば、

カードには「キッチンにあるものを10個大文字で書きなさい」などの課題が示されている。このように、子どもたちが週計画を自分で立てられるように、側面掲示や教室における教具の配置が工夫されている。ただし、必須の学習以外に子どもは自分でその他の学習内容を加えることもできる。これらは、子どもが自分でスケジュールの計画と実施ができることを主とした自立的な学習を支える支援であると考えられる。

子どもたちが週計画に基づき学習を進めている間に、GLは9:10頃から3年生10名に「読み理解」のインストラクション、9:25頃から5年生6名に繰り返りのない2桁の足し算の筆算のインストラクション、9:40頃から4年生10名に数直線を用いたかけ算のインストラクションを行っていた。ただし、子どもの状況に応じて同じ学年でもインストラクションを受けない場合も想定される。インストラクションはサークルで電子黒板を用いて行われていた。

10:10頃からは、各自が設定したテーマに取り組む「拡大ブロックアワー」である。これは全校での取り組みである。本来は10時からの予定であったが、子どもたちの様子に応じて少し遅れての開始となった。暗号を作っている子ども、小鳥を描いている子ども、粘土遊びをしている子どもなど、それぞれ好きなテーマを設定して取り組んでいた。子どもたちは、「スタート」と「ゴール」、その間の道のりだけが示されたプリントに、自分なりの計画を立ててそれに沿って行っていた。こうした取り組みは、自立的に内容に即して計画を立てて学習を進める機会を支える役割を担っていると考えられる。

10:30頃から持参したフルーツ等をサークルで食べ、10:45頃から外遊びを行い、11:00頃には教室に戻ってきて、再度ブロックアワーが行われる。11時頃から、GLは一人ひとりの机をまわって学習状況を確認し、必要に応じて支援を行う。11:10頃から3年生10名に繰り返り下がりのある引き算(例:14-8)のインストラクションが行われる。インストラクションでは、最初に4と6で10、など10を作る数字の組み合わせについて発問がなされ、子どもたちと確認した上で、14-8であれば、8はいくつといくつに分けられるかが尋ねられる。14は10より4大きい数字であることを数直線で確認した後、8を4と4に分け、4と6で10になる

ことから、答えは6であるという減減法での説明がなされた。これは子どもたちにとって理解が容易でなかったようで、その後、15-7、16-9などの例を用いて、発問を重ねながら時間をかけて説明していた。理解した子どもから自分の学習に戻っていき、最後は一人になって教えてもらっていた。

12:00頃になると、子どもたちは片付けを行い外遊びに出かけていった。12:30頃からランチをとり、12:45頃から読書を行っていた。GLはその間に3人の子どもに単語の発音に関するインストラクションを行っていた。13:00頃からはペアで音読が行われた。3年生は、カードに書かれた綴りを発音し、4年生はフルーツに関する文が1文ずつ書かれたプリントを読み、5年生は人の腕の筋肉についての説明文を読んでいた。5年生が腕の筋肉についての文章を読んでいるのは、WOのテーマに由来していると考えられる。

13:25頃から全体で学習の進捗状況を確認した後、13:30頃からサークルになり、この後のWOの活動についての指示がなされる。WOでは、3人程度の小グループで、人の身体についての問いを黄色いカード、書籍やインターネットで調べた答えを緑のカード、筋肉などの絵を青いカードに記入する活動が行われた。カードには、調べたことを自分の言葉で表現することが求められており、言語の学習を活かして取り組むことが期待されている。教室にはこれまでのWOで作られた作品が掲示されており、この活動で作られていたカードも教室への掲示が想定されていると思われた。

WOでは、なかなか集中できない子どもたちがいたことから、13:55頃にGLは一度子どもたちをサークルに集めていた。そして、「頑張っている人もいるけど、そうでない人がいますね。どうして？」と問う。子どもたちからは「疲れているから」「何をしたら良いのかわからないから」などの発言がある。そこで、GLはさらに「一緒に何かに取り組むとき、私たちはどうしたらいいでしょう？」と問いかける。子どもたちからは「仕事を分担する」、「共働する」などの発言がある。GLが、さらに「共働とは何でしょうか？」と問いかけると、役割分担や、互いに耳を傾けること、叫び声を出さないこと、などの回答がある。このように5分程度の話し合いの中で子どもたちから、学習上の大切な点について言葉を引き出し、全体で確認がなされた。

その上で、14:00頃からWOを再開し、14:15頃から片付け、14:20頃から帰りのサークルを行い、14:30には保護者の迎えのもと1日を終えた。

(3) 高学年グループ

1日の流れは表4の通りである。高学年グループは日本の4～6年生にあたる。朝のサークルが始まる前に子どもたちは自分の学習に必要な物を机の上に揃えておく。8:30になると朝のサークルが始まる。当番の子どもが全員の名前を呼んで一人ひとりに挨拶を行い、電子黒板に示されたその日の予定を読み上げる。その後、グループで培養している細菌の観察がなされる。WOの一環で学校の「トイレの便座」「トイレの内側」「洗面台」「学習用図書」「電子黒板」など26箇所から細菌が採取され、シャーレで培養されている。この観察は、毎朝、サークルで行われる。トイレなどは細菌が増殖すると予想されていたが、あまり増えていないこと、多くの子どもが使うペんに細菌が多いことなどが確認されている。WOに関しては、マインドマップや作品（子ども同士で実際の人の形を紙に写しとり、臓器などを書き込んだものなど）が掲示されていた。

表4 高学年グループの1日の流れ

時間	子どもの活動	GLの働きかけ
8:30	朝のサークル	
8:45	グループ全体で読み理解の活動	
9:00	(ブロックアワー) 週計画に基づき自分の学習を行う	*開始後すぐに一人ひとりの机をまわる *9:15頃から6年生に算数のインストラクション *9:20頃から7年生にテスト返却と算数のインストラクション *9:40頃から8年生にテスト返却と方角についてのインストラクション *9:50頃から一人ひとりの机をまわる
10:30	(フルーツサークル) フルーツ等を食べながらクイズに答える	*WOに関わる細菌に関する本を読み、クイズを出す
10:45	外遊び	
11:00	(ブロックアワー) 週計画に基づき自分の学習を行う *11:20頃 遊び	*11:00頃 外遊び中に口論になった女の子5人と話し合い *11:20頃 遊び *11:30頃 再度一人ひとりの机をまわる
12:00	外遊び	

12:30	ランチ	*外部の方が栄養教育
13:05	読書	
13:20	(WO) (サークル) → (個人) 小グループで細菌に関する活動	*本日の学習の進捗状況確認 *最初にサークルで短く WO での取り組み内容の確認
14:15	片付け	
14:25	帰りのサークル	
14:30	帰宅	

8:45 頃から学年ごとに異なるオランダ語のプリントの読み合わせを異年齢のペアで 5 分程度行う。その上で、全員に同じ物語文が配られ、GL が音読する。子どもは代名詞に印をつけたり、GL からの問いに答えたりしながら物語文を理解していた。

9:00 頃から、ブロックアワーが始まる。子どもたちは、中学年と同様に自分の週計画にしたがって学習を進める。イヤーマフをつけて学習している子どもや、教室の外で学習する子ども、窓辺にクッションが置かれたスペースで学習する子どももいる。教室の外で学習する場合には、ルールが決められており、特定の子どもばかりが外に行かないように工夫されている。

週計画ファイルは、中学年と同様に、色で学年が区別されている。週計画の構成も、基本的に中学年グループと変わらない。ただし、自分で書き込む欄、選択学習欄、来週取り組みたいことを書き込む欄など子どもが決められることが増えている。学習が終わると中学年と同じ色で算数やスペリングなどの欄を塗りつぶすことが求められる。

ブロックアワーが始まるとすぐに、GL は一人ひとりの机をまわり、計画の通りに進めていけそうかを確認している。その上で、9:15 頃から、6 年生 7 名に算数の式の計算順序についてのインストラクション、9:20 頃から 7 年生 6 名にテスト返却と、テストを受けての 3 桁割る 1 桁の割り算や、小数かける整数のかけ算についてのインストラクション、9:40 頃から 8 年生 7 名にテスト返却と、テストを受けての方角の示し方についてのインストラクションを行っていた。テストには点数などは算出されておらず、何が分かっている、何が分かっているかが確認されていた。インストラクションは中学年と同様に、サークルで電子黒板を用いて行われていた。

一通りインストラクションが終わると、9:50 頃から

再度 GL は一人ひとりの机をまわり、子どもたちがインストラクションを本当に理解して学習を進められているかを確認し、必要に応じて支援していた。

10:30 頃からは、低・中学年と同様に、持参したフルーツ等をサークルで食べる。GL が細菌についての本を読み、本に載っている問題をクイズのように出題し、子どもたちは回答しながらフルーツ等を食べていた。これは WO の形成的評価の役割もかねている。

10:45 頃から外遊びに出かけた後、11:00 頃から再度ブロックアワーの時間となった。GL は、外遊びの時間に口論になった女の子 5 人と、教室の外の机で話し合いを行い、仲裁をしていた。それがひと段落し、11:20 頃に GL が教室に戻ると、2 人の女の子が GL に遊びがしたいとお願いに来る。GL が認めたため、全員で教室で次の遊びが行われた。GL が音楽をかけると、子どもたちはダンスをする。GL が音楽を止めると、全員その時のポーズのままピタッと止まり、止まれなかった子どもは負けとなり着席する。それを繰り返す遊びである。5 分程度遊んで発散した後は集中して学習に取り組んでいた。中学年グループでは、学習に集中できない子どもが見られた際に、子どもたち全員に話し合わせる場面もあったが、そうした積み重ねにより、高学年になるにつれて、気分転換が必要なタイミングなどを子どもたち自身が判断して学習を進められるなど、学びを子どもたち自身でコントロールする力が育っている様子がうかがわれた。

11:30 頃から GL は、再度一人ひとりの机をまわり、子どもたちが計画した学習を本当に終えているか、つまづいていないかを確認し、必要に応じて支援していた。子どもたちは基本的に自己採点をするが、GL は子どもたちが見落としている間違いに印をつけたり、週計画にフィードバックを書き込んだりしていた。

その後、12:00 頃から子どもたちは外遊びに出かけ、12:30 頃から外部の方が栄養教育を行う中でランチをとっていた。13:05 頃から静かに読書を行い、13:20 頃からサークルになる。WO の指示が行われた後、子どもたちは「細菌やウイルス」を共通のテーマとしつつ、それぞれの小グループで子どもが設定したテーマで学習を進めていた。新型コロナウイルスや肺の模型作り、「細菌はどこに住んでいる?」「最も大きな細菌はどのくらいの大きさ?」などの問いが書かれた「細菌すご

ろく」作り、細菌について学んだことを見開き型の色画用紙 (lapbook) にまとめる活動など、各グループで様々な取り組みが行なわれていた。理科で学ばれるような身体に関する学習、言葉で表現する学習、図工のような創作活動を伴う学習など様々な学習を活かす機会となっていた。こうした時間は、子どもたちが自立的・共働的に内容に即して計画を立てて学習を進める機会を支える役割も担っていると考えられる。14:10頃から掃除を行い、14:25頃から帰りのサークルを始め、14:30には1日を終えた。

5. おわりに

本稿では、低・中・高学年ごとの違いと共通性に目を向けながら、オランダのイエナプラン教育における指導性について考察することを目的としていた。その結果、認知面での目標は長期的には共通しており、むしろ短期的な調整や働きかけを工夫する点で指導性が発揮されていた。また、評価においては、8年間を通じてポートフォリオを用いて、子どもたちの成長が多面的に捉えられていた。その他、認知面については、子どもに応じた即時的なフィードバックとセットでの形成的評価が重視されていた。情意面については、グループ全体を育てるとともに、一人ひとりの文脈に即して子どものより良い発達を促すために形成的評価が実施されていた。

認知面に関わる教師の指導性においては、言語や算数などを一斉もしくは小グループに教えたり、WOで取り組む学習課題を指示したり、一人ひとりに応じて働きかけを調整したりと、子どもたちが適切に目標を達成できるようむしろ積極的に指導が行われていた。ただし、学年が上がるにしたがって、子どもたちが自分で取り組む課題を選ぶなどの自由度はあがっていた。

情意面においても、学習に集中できない子どもが見られた場合に、その原因や解決について話し合わせるといった積極的な指導が行われていた。その結果、高学年になると、子どもたち自身で学習をコントロールする力が育っていると考えられた。

このように、オランダのイエナプランスクールでは、8年間をかけて長期的に子どもたちが目標を達成し、学習のオーナーシップを持ち、他者とともに学習に取り組んでいけるよう働きかけがなされていた。これら

の指導は、学力保障と一人ひとりの個性の尊重をいかに両立するかを探ろうとする営みであると考えられる。

ただし、「指導」の在り方によっては、ペーターゼンの理念と時に齟齬が生じる可能性も考えられる。特に、言語や算数の指導は主にオランダ固有の文脈が機能している可能性も考えられるためである。こうした点の検討については、今後の課題としたい。また、本稿はあくまで1校での数日間の観察と聞き取りに基づく調査である点に限界がある。本稿で示されたことを過度に一般化はできない点に留意が必要である。

謝辞 調査対象校を紹介して下さったりヒテルズ直子氏と、元校長や現校長をはじめとする調査対象校の教職員の方々に感謝する。また、本研究は JSPS 科研費 21K13513 の助成を受けたものである。

註

- 1 深沢広明「イエナ・プランの教授学的検討 (II) — 指導 (Führung) 観を中心に」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第28巻、1982年、pp.112-115。
- 2 深沢広明「改革教育学の教授学的検討 (II) — 教師の指導性の問題を中心として」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第8巻、1982年、pp.46-52。
- 3 手取義宏「ペーターゼンの授業の指導論に関する一考察」大阪市立大学大学院文学研究科教育学教室『教育学論集』第17巻、1991年、pp.57-66。
- 4 安藤和久「ペーターゼンの授業指導論に関する研究 — 集団作業 (Gruppenarbeit) における指導性の検討」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第65巻、2019年、pp.493-498。
- 5 安藤和久「イエナ・プランにおけるグループ作業の位置と役割」広島大学大学院人間社会科学研究科紀要『教育学研究』第1巻、2020年、pp.204-212。
- 6 リヒテルズ直子『今こそ日本の学校に！イエナプラン実践ガイドブック』教育開発研究所、2019年。
- 7 フレーク・フェルトハウズ、ヒュバート・ウィンターズ (著)、リヒテルズ直子 (訳)『イエナプラン 共に生きることを学ぶ学校』ほんの木、2020年 (原典：Velthausz, F. en Winters, H. (2014). *Jenaplan, school waar je leert samenleven*, Zutphen: NJPV)。

教育・人間科学講座 准教授
受理 2023年2月27日